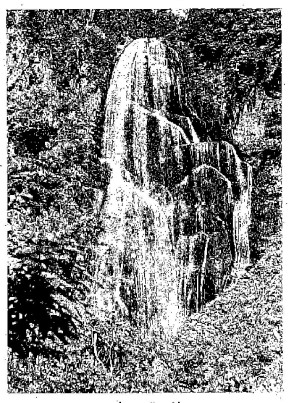
悲恋の安ノ滝

享保の初めごろというから、一八世紀初めごろのことである。打当村十二段見崎金山が山師の津ノ国屋八によって開かれたとき、黄金の夢に吸い寄せられるように、若者たちが山を越えて金掘りにやってきた。金山には村の若い娘たちも働いていたが、そのなかにヤスという十七歳になる娘がいた。ヤスは顔立ちもよく気立てもやさしかったから、若者たちの憧れの的であった。いい寄る男は数多かったが、ヤスはだれも近づけようとしなかった。そのヤスが、恋をしたのであった。相手は腕もよく、実直だと評判のよい久太郎という若者頭であった。久太郎も見崎小町といわれるヤスを憎からず思っていた。だが、山には男女の仲は御法度という固いおきてがあった。



安ノ滝

ある春の一日、山菜取りに行ったヤスが、帰り道久太郎の山小屋の前を通りかかると、小屋には久太郎が一人で留守番をしていた。日ごろ人目に妨げられて思うように久太郎と口を聞けないヤスは、久太郎のもとに駆け寄り、愛を語り合った。ところが運悪く、仲間たちが帰って来たのである。仲間たちはかねてから二人の仲をねたんでいたから、金山の山小屋は昔から女の出入りは法度になっていると騒ぎ立てたのであった。

この日から、久太郎には見張りがつき、外出はおろかヤスとの文通もできなくなった。久太郎は難がヤスに及ぶのを恐れ、「いつか必ず戻って来る」とヤスに伝えてほしいむね人に頼んで山をおりた。頼まれた人は、仲間の制裁を恐れてそのことをヤスに伝えなかったため、ヤスは事情がわからず、悶々と久太郎を思い続けるのだった。明日は会える、明後日は会える、と待つうちに、夏がすぎ、秋が来た。だが、久太郎は姿を見せなかった。

ある日のこと、若い金掘りの一人が「久太郎は法度を犯した罪でとらえられたから、もうあいつのことは思いきったほうがいい」とヤスに伝えた。ヤスが驚き、そして泣き悲しんだのはいうまでもない。ため息をつくばかりのヤスは、中秋名月の夜、思い出の山小屋へ行ってみた。だが山小屋はすっかり荒れ果て、虫がすだくだけであった。

絶望の淵に沈んだヤスは、そのまま山道を大滝のほうへとたどったのである。あとを追って来た若い金掘り人夫たちが追いつこうとしたとき、ヤスは「久太郎、久太郎、久太郎」と三度恋人の名を呼んで、巌頭から千尋の滝壺めがけて飛び込んでしまった。

以来この滝を「ヤスの滝」と呼び、ヤスの滝に登ると恋が叶えられると、若い男女がヤスの滝に登るようになった。そして、月夜には、ヤスが壮厳な風景をバックにして、巌頭に腰をおろし、黒髪をすいている姿をいまでも見かけることがあるという。